エアロビクスと思想史の方法

高　野　清　弘
（法学部助教授）

エアロビクス、これが無趣味な私のほとんど唯一の趣味となってきた。このままでは糖尿になるからと医師にすすめられて始めたのだが、これがなかなか面白くてもう三年もジムにかよっている。とはいえ、私にあのジャズダンスのようないわゆるエアロビクスができるわけもなく、汗取り用に厚着をして動かない自転車のペタルを50分程踏み、風呂に入って帰ってくる。それだけのことだが、まことにこれが楽しい。もともと私には、誰が見ても面白くもおかしくもないことをえんえんと続けられるという妙な資質があるのだが、とはいえ、汗だくでペダルを踏むこと自体が楽しいわけではない。実は私はジムに文庫本や新書を持参し、ペダルを踏みながらそれを読むことにしているのだ。運動をしながら書を読み、時に目を閉じて想念を千里のかなたに放つ。これまさに心身双方のエアロビクスといわずして何ぞや、というわけである。

さて、この私も、今秋ようやくにして長年のホッブズ研究を一冊の本にまとめることをえた。したがって、自転車のペダルを踏みながらも胸中去来するのは、主として自分の論文集にかかわることがらである。しかも、仕事が一段落した時のつねとして、反省すべき点ばかりが一つ一つ思い起こされてくる。とりわけ今私が反省していることは、思想史の方法に関する議論がかまびすしい中、明確な方法的自覚に立つことなく、ホッブズ研究を続けてきたことである。それには言訳がないわけではない。私のような若輩が方法論を云々することはおこがましい、真実私はそのように考えてきたのである。

たとえば、私が次のように述べてホッブズ研究を開始したとしよう。すなわち、私がここに採用した誰それのしかじかの方法は、「予断や前了解、更には、視角の暗黙の限定」を排するものであり、これによってはじめて研究者は、「思想家を思想史家の『操り人形』に還元する傾向」にあった従来の研究の弊を脱却しうる、と。ところが、その実私のホッブズ研究が、どこを切ってもホッブズならぬこの私の顔の金太郎飴でしかなかったとすればどうであろうか。手にあまることはなすべきではない。こうして私は方法論について禁欲したのである。

しかし、今はもう少し方法を意識すべきであったと思っている。とりわけ、私のごく親しい友人が私の校正刷りの原稿の一部分を読み、方法論の欠如をすこぶる辛辣に批判して

きたこともあって、反省の思いしきりである。彼はいう、「この論文はお前の頭の中身をぶちまけたようなもので、いわばお前の意識の流れをそのまま綴ったものにすぎない」、と。唇を噛んで、「それほどにはひどくない」との反論を飲み込み、「今度はお前の番だ」と心中秘かに復讐を誓ったが、そのためにもまずはみずからの方法をいま少し明確化しなければならないのである。

ところで、エアロビクスでどんな本を読んでいるかというと、ギリシャやローマの古典の翻訳が主である。その中には、以前に読んだものもあれば、恥しながら読み残したものもある。よくいわれることだが、こうした古典はすでに読んだものも読み返すたびに発見がある。先頃は、『ニコマコス倫理学』の中で、財産という言葉に「ウシア」とルビがふられているのに気づいた。としたら、ロックのプロパティ論はこのあたりから考えるべきかな、と考えがひろがる。また、アリストテレスが、プラトンの妻子の共有を批判して、そんなことをしても子供の顔から父親が確実に推定されることも珍しくないと述べているのに接すると、ペダルを踏みながらも、私に瓜二つの愚息たちの顔がまのあたりに浮かんできて、一人悲哀に沈む。プルタルコスのソロンの章では、ソロンの作った法の中に、内乱が勃発したさい、いずれの党派にも与しなかった者は、内乱終結後市民権を剝奪されるという規定があったとの記述を読んで、日和見主義の私などいにしえのアテナイでは到底暮しえなかったと知らされる。

しかし、以上のような発見のみを求めて、私は古典を読むのではない。古典に接するとき、私は、もっと根本的なところで、自分自身そして今自分が研究対象としている思想家—私の場合はホッブズ—と断然異った精神に出会う。その時の愕然たる思い、驚き、これが私をして、汗にまみれてペダルを踏むのはつらいけれども、今年の夏休みなどほぼ毎日ジムへと足を運ばせたのだ。

この驚きをもう少し具体的に説明してみよう。たとえば、今私はエアロビクスに励んでいる。なぜかと自問すれば、健康第一だからということになろう。それではなぜ健康が大切なのか。こうして問いを重ねてゆくと、結局私は、みずからの肉体的生命をこよなく重要視している自分にゆきつく。ところで、この点に関するかぎり、私とホッブズとは意見が一致する。周知のように、彼は、各人が可能なかぎりの手段を用いて、自己の自然的生命の維持、存続を図ることを、各人に与えられた自然権にもとづくものとして判然と正当化した。しかし、古典古代は違うのである。すなわち、ソフォクレスは合唱隊におよそ次のような趣旨のことを歌わせている。「人間にとって一番幸福なことは生まれてこないことであり、二番目に幸福なことは早く死ぬことである」、と。同様のことは他の詩人も述べている。また、ヘロドトスの伝えるところでは、先述したソロンは、リュディア王のクロイ

ソスに、金銀財宝の山と積った宝物蔵を見せられたあと、世界で一番幸せな人間は誰かと問われ、「王よ、それはあなたです」との答を期待したクロイソスの思いを裏切り、見事な死に方をした人物を挙げて、「人間にとっては生よりも死が望ましい」と語ったそうである。

健康第一、生命あってのものだねとエアロビクスに励む私は、「生よりも死が望ましい」などという言葉に接すると本当にびっくりしてしまうが、プルタルコスなどを読んでいると、さらに、古典古代においては、生命への執着が金銭欲以上に卑しむべきこととされていたことを知らされる。動物ならぬ人間には、生命を捨てても守るべき大切なものがあるというのだ。生命への愛 philopsychia は奴隷に固有のものであった。奴隷は、人間としてたえがたい事態に直面したさい、なお人間たるの尊厳を守る方途—自殺—があるにもかかわらず、それを回避して奴隷の状態に甘んじているのだというわけである。私など、ギリシャの昔だったら、さしづめ奴隷根性の持ち主として唾棄すべき存在であったということになろう。

人間の生命にこだわる点において、以上述べてきたところとは対蹠的な立場にあるのがキリスト教である。なにしろ、この宗教のもっとも重要な儀式は聖餐式であるが、その式ごとにそれにあづかる者は、「主の死を告げ知らせる」のであり、また、「体のよみがえり」がキリスト教のきわめて重要な教義であることはひろく知られていよう。こうして、ヨーロッパ思想には、人間の生命をどのように評価するかという根本的な点において相対立する二つの思想の流れが認められるのである。とはいえ、このようなことは誰しも知っているところであろう。それなのに、そうしたことを述べたくなるのは、エアロビクスによって体力がつきすぎたせいであろうか。過日も、とある研究会で、私より年少のある研究者が、「人間の生命を大切にするというホッブズのヒューマニズム云々」と発言するのを聞いて、びっくりした。思わず、御専門はと聞くと、H・アレントの研究だという。まったく、また何をかいわんやであろう。

さて、このあたりで、私を酷評したあの友人に矛先を向けてみよう。彼は、私など及びもつかぬほどていねいに史料にあたる人間であり、どこか自己限定していま一歩踏みこんだ分析をあえて行わないところに不満をおぼえながらも、私は彼をつねづね尊敬してきた。この彼が、この夏、フランシス・ベーコンとホッブズの思想を比較して論じた一つの論文を著し、私のところへ批評を乞うて送ってきた。その論文の主眼は、ベーコンとホッブズの宗教政策上の類似性を指摘するところにある。さもあろう、とは私も思う。ただし、宗教「政策」のレヴェルでは。しかし、人間の生き方や考え方を根本において規定するものとしての思想のレヴェルではどうであろうか。この点私には疑問が残った。

たとえば、先述した死生観を問題とすれば、ホッブズが、古典古代のそれからまことに

遠いところに立っていたことはいうまでもない。彼によれば、死への恐怖を凌駕する情念など何一つない。だからこそ、彼は、人間をコモンウェルスの設立すなわち平和へと向かわせる発条を、この情念に期待した。しかし、ベーコンはこれとは異なる。彼は、『随想集』「死について」の章で述べている。「どんな情念も死の恐怖を負かして支配できないほど弱くはない……復讐の念は死に打ち勝つ。愛は死を軽んずる。名誉はそれを願う。悲しみはそれに逃げこむ。恐怖はそれを先取りする」、と。彼によれば、退屈のゆえに自殺することだってあるのが人間なのだ。また、他の箇所で、彼は、「国のために身を捧げて死んだ人」の名誉こそ最高のものと述べているが、このような考えは、ホッブズには薬にしたくても見あたらない。

また、友人を論じても両者は異なる。ベーコンは「友情について」の章を、「孤独を喜ぶ者は誰でも野獣か神である」というアリストテレスの言葉で開始し、友情の効果を縷々論じたあと、「友人がなければ、舞台を去ってもさしつかえない」と述べて、その章を終えている。しかし、ホッブズにあっては、誰しも御存じのように、「人間は人間にたいして狼」なのである。生年にしてわずかに３０年ほどしか違わないこの両者のこうした思想の相違は、何によって生じたのか。私は、両者の古典古代の思想との距離の差、したがってまた、キリスト教との距離の差にその秘密の鍵があると見当をつけているのだが、いかがであろうか。私の友人は、ベーコンとホッブズを比較しながら、両者の上述のような差違には気づかなかったようだ。いやしくも思想史研究といいながら、かかるありさまとは私の友人にあるまじきことではないか（これで半矢がほどは報いたことになるだろうか）。

さて、以上長々と準備運動を続けて来たが、私は目下のところ、問題の思想史の方法について、三角測量的方法とでもいうべきものを莫然と考えている。研究者がある思想家を対象として選ぶさい、まるで自分と無縁な思想家を選ぶとは思えない。どこか引かれるところがあるからこそ、その思想家を研究するのであろう。そして、研究を続けていく内に、ますますその思想家に魅了されてゆく。現にこの私はホッブズが好きで好きでたまらない。しかし、ここに一つの危険がひそんでいる。その危険とは、すなわち、研究対象としての思想家と自己との距離感の喪失である。私自身を例にとるならば、ホッブズと対話しているつもりが、いつのまにか、自分との対話つまりひとり言になっていたのではないか、と反省しているのである。すでに触れたように、私は人間の生命はなによりも大切だと思う。この点、ホッブズもまた同様である。しかし、このような私とホッブズとの一致は、私ではなくホッブズが、現在ではなく彼の時代にあって、そのような思想を述べたことの意味を理解する眼を曇らせるのではないか。彼はなぜあれほど人間の生命に執着したのか。また、その思想は西洋思想のいずこに淵源するのか。このような問いは、生命が大切なのは

あたりまえと信じている私が、ホッブズと対話しているかぎりでは生じないであろう。しかし、生命への愛など奴隷的なものにすぎないとする思想の世界から、いま一度ホッブズを眺めるとどうであろうか。まだまだぼんやりとしたかたちでしかないが、私は目下そのようなことを思想史の三角測量的方法として考えているのである。私のこうした考えが、汗にまみれてペダルを踏みながら文庫本を読んでいるときに感じたあの愕然たる思いに端を発することはいうまでもない。

ところで、研究者と研究対象との間の距離感の喪失を私が気にするようになったのは、同じくホッブズを専攻する私のいま一人の友人が、拙論を評して「実存的にすぎる」と述べて以来のことである。揶揄めいてはいるが、正鵠をえた彼の批判が身にこたえた私は、自戒しなければと強く思った。しかるに、骨の髄からホッビストの私は、まったく顧みて他をいうの類でしかないが、他の方々の研究がこの点から気になり出した。たとえば、新たなロック像を確立したとして世評高い加藤節氏の御研究も、私にはこの弊を免れてはいないように思われた。

氏の提起するロック像は、端的にいえば、「思考する実存」への召命の意識に立つカルヴィニスト・ロックというものである。私は、氏のロック研究にたいしていくつかの疑問を感じたが、ここでは、氏のいう「思考する実存」へのロックの召命意識がどのようにして導出され、立証されているかだけを問うてみよう。氏は、ロックが死の床にある父に宛てた書簡にその意識があらわれているという。その書簡において、ロックは、自分に与えられる遺産など何もなくとも、自分には「思考する頭脳と何かを作り出す手と勤勉さ」とがあると述べて、父を慰めている。ところで、氏の研究に接したとき、私はまず「思考する実存」という氏の造語に異和感を覚えた。けだし、自己をさらには人間一般を「思考しない実存」と規定する思想家がいるだろうかと訝しく思ったからである。だが、氏はその語を学者と同義として用いているようであり、そう理解した私は、ロックの父宛の書簡から上述の召命意識を出した氏の論理に、当初はあまり問題を感じなかった。ところが、まったく突飛なことから一寸変だなと思い始めた。

あるところで、私は床屋の例の三色の看板のことを話し、赤は動脈、青は静脈を示すと述べた。しかし、そういった途端に間違いに気づいた。動脈・静脈の区別は、ホッブズの友人W・ハーヴェイが心臓ポンプ説を確立するまで、ヨーロッパ人といえども知るところではなかったのである。正しくは、青が外科的処置をなしうることの印たる青い握り棒、赤はそれが血に染まるさま、そして白は包帯を示している。それはともかくとして、私が床屋の看板のことを話したのは、かつてヨーロッパでは、床屋が外科医をかねていたこと、つまり、内科医に比して外科医が低く評価されていたこと、その理由は内科医が頭脳を使

うのにたいし外科医は手を使うところにあったことを述べたかったのである。周知のように、古典古代以来手を使う仕事、さらには労働は、元来奴隷のなすこととして侮蔑の対象であった。さて、私がこのようなことを考えていたとき、ふとあのロックの書簡が思い出されてきた。そして、考えた。ロックは、大仰にいえば、ヨーロッパ二千年の伝統に抗して、「手」と「勤勉さ」とを「頭脳」と等置しているのではないか、と。何が彼にそうさせたのか。思想史の通常の知識からすれば、それこそ彼のカルヴィニズムであるということになるであろう。しかるに、加藤氏は、ロックをカルヴィニストと解していながら、こうしたことを等閑視し、「頭脳」をあまりにも重要視されたのではあるまいか。その原因は、氏の学者としての自己規定が強烈なあまり、氏とロックの距離の感覚が失われたことにあるのではないだろうか。

さて、以上まことに勝手なことばかりを書きつらねてきてしまった。なにはともあれ、そろそろ私は我が畑を耕やさなければならない。ホッブズ研究には一応のくぎりがついたとして、新たなところへと向かう私の研究生活はこれからも苦難に満ちたものであろう。しかし、私はまがりなりにもキリスト者ではないか。パウロは述べている、「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出す……そして、希望は失望に終ることはない」、と。ところが、こうして珍しく殊勝な気持となったところへ、エアロビクスの読書のしすぎであろうか、ギリシャ神話における希望の理解が急に思い出されてきた。曰く、「人間たちはみな、希望の嘘にまどわされて、生きるに詮なき人生を、自殺もせずに生きながらえているのだ」。はてさて、どうしたものであろうか。